

李
蒼
集
全

四
季
雜
志

特 別
~4
8108



4
8108

宗良親王御集

李花集 宗良親王御集

春哥

立春の心を淡ゆ

まふのふとくもはるをひと免る程もあう一喜世の山
か首がふとゆに立春天

久國のゆきの思ふ戸が^とあなる祓伐ようつふきの山に
立春をさ

夕こよわい霧よりこぼはるる^この空をのびひちまわさる後
立春をさ

閑をたうらわぬいまに年越くまはさふらるる夜乃山
早春河

まふのふとくもはるをひと免る程もあう一喜世の山



早雲湖

早雲乃山雨のうきしつにぬれもたげまじむにきり
百をいふにさるゆにむにむにむに

そはなすこしあはれ海にりてるもむにむにむに
くるくらくとえいふもむにむにむにむにむに
ゆ保唯乃まのむにむにむにむにむにむに
霧中いふもむにむにむにむにむにむに

いふたつる都乃たつらにまをむにむにむにむに
ゆにむにむにむにむにむにむにむに

春乃まはるの袖もつらむにむにむにむにむに
まをむに

ふたつるむにむにむにむにむにむにむに
あつるむにむにむにむにむにむにむに

ゆにむにむにむにむにむにむにむに
中後唯后海方にもあまむにむにむにむに
むにむにむにむにむにむにむにむに

あつるむにむにむにむにむにむにむに
あつるむにむにむにむにむにむにむに

あつるむにむにむにむにむにむにむに
あつるむにむにむにむにむにむにむに

延元西吉野行宮にゆいしは清くまじら申に

あつるむにむにむにむにむにむにむに

口——に後後

こゝろにありては、
山は雲をよそに

雲のふり古来りちるれとわらわら
中候准后にむね
後には時——らあふくこころ——らそにせし
君は代もまふく人のまはるるまのよそをいひし人
いあうくあふく——はよこ

あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう

あふくしうあふくしうのまふくあふくしう

あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう

真国八南朝法村上市
半写

あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう

あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう
あふくしうあふくしうのまふくあふくしう

久壽より卯より辰とありてねむる形は乃むとの言なり
子日也

若く代は行はぬあはれ縁を自覚しねむるなり
若菜也

まやにたねをまきねをまきふにこり糸は若くは
常のこりひのせいの初より一はをねむる若くは
いねの日に若くははじねとなりねむる若くは
まにえにうねなをまきふ人福也若くは
ふねのりいねもえぬふりねむる若くは
子首の中にも

開霞

まにねのこりいねもえぬふりねむる若くは
名所也
ねむるにせりいねもえぬふりねむる若くは
はじねの日に若くははじねとなりねむる若くは

海江島

ついでにこりいねもえぬふりねむる若くは
延元元年まにねをまきふ井城は信行に海江島の移り
はじねの日に若くははじねとなりねむる若くは
わにえの言なりいねもえぬふりねむる若くは
たふねは海もたふね白きなりいねもえぬふりねむる若くは
まにねのりいねもえぬふりねむる若くは

まはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

まはれの思ひの本末もよすまじき言はれり

住居まじき言はれり

そのあやむらとてんたてしとてあはれ物とてまじき言はれ
ふもあやむらとてんたてしとてあはれ物とてまじき言はれ
まじき言はれとてあはれ物とてまじき言はれ

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
百まじき言はれとてあはれ物とてまじき言はれり

山にまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり
あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

あはれにまはれぬらんわが人のいふまじき言はれり

まらぬ〜
法華の夜

らもな〜
新場のまらぬ

梅〜
候

ら〜
候

子首〜
候

ら〜
候

春物と

海〜
候

海〜
候

わ〜
候

奥〜
候

わ〜
候

日〜
候

澤〜
候

人〜
候

今〜
候

可〜
候

人〜
候

可〜
候

夕〜
候

奥〜
候

右〜
候

旅〜
候

竹〜
候

まきわめいしうけく屋のふあうへふあを絶しきとらふ
いふを身のおうくえ侍一は屋のゆい

後もまわつれをほのふあふしうあええしとゆるあふひ

百三十九番一は四月

はうらなふ石紋のせまの船中の月子をうねとまういふな

五月

あのをにけしむひう種とまの船の月と光乃とむしとらふ

四幕中百三十九番一は

宿うらむしむよのあまうまの船のまわつとむしとらふ

なうこと侍一はまなとらふ

神乃うらふあまう月とせむまうあ乃あまの身と船と

中後准正侍とまを侍一は船のまにうあまうとらふ

を履七月のあの方の神とむしとらふ一は例のまな侍

いれとむしとらふとあむとあの方のたらむとむしとらふ

花の方侍一は侍とらふ

はついのあまうあむとあむとあむとあむとあむと

いふとあまうあむとあむとあむとあむとあむと

いれとむしとらふとあむとあむと

いれとあむとあむとあむとあむとあむとあむと

あつ侍とあむとあむとあむとあむとあむとあむと

あつの色とあむとあむとあむとあむとあむとあむと

針山侍とあむとあむとあむと

いれとあむとあむとあむとあむとあむとあむと

花のまに侍とあむとあむとあむと

たうとてはつらうかむしに書かすま作らる種なりと云ふ
わが一は多あり一にたを

かきして平井とうかろ名かふたう由地乃たのこよと
たのたの中

久固りあつてつむりやんかむしにまにゆえた花の色に
かきつらうの花に中しきつらう一はの

少や

はつらうやういふ言はくはたれはゆり前も有る
人に給はるる一はなは

この後にはつらうのつらうはつらうのつらうのつらう
いふにま先かむしに一はつらうのつらう

なはつらうのつらう

このはつらうはつらうはつらうのつらうのつらう
はつらうのつらうのつらうの中

あつらうのつらうのつらうのつらうのつらう
あつらうのつらうのつらうのつらう

あつらうのつらうのつらうのつらうのつらう
あつらうのつらうのつらうのつらう

あつらうのつらうのつらうのつらうのつらう
あつらうのつらうのつらうのつらう

あつらうのつらうのつらうのつらうのつらう
あつらうのつらうのつらうのつらう

あつらうのつらうのつらうのつらうのつらう
あつらうのつらうのつらうのつらう

まの目わいさすしは乃のくまをいさしし世にたじふあきつふ

國后宮

いふ乃のくまはむせ乃中を控してつさあししはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

行はむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

四書中百きつむ漢書中

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

うしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

信使玉守ま教とつあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

つりてあむいさつむあしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

花の舟まいさつむあしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむ

あむしはむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

延元四年其のひもや顯あつなむいさつむあむしはむいさつむ

けつことのあつて今あむいさつむあしはむいさつむ

の軍級あつてあむいさつむあしはむいさつむあむしはむいさつむ

と送りしに海生のひねあむいさつむあしはむいさつむ

勝中記
貞元元年上
四月三日
四月三日

海とくもわいとく人老くはしらのさくらをばとくしと無
りよこせとくしとくしと

櫻子伝

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

人しとけうり成りたる人しとけうり成りたる人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

あつらまはきりてしとせきかたけの盛とけうり人

〜〜九条の昔のこゝろいぢ〜〜しつと

こゝろしきわらひいぢ〜〜たのちのち〜〜はよりな〜〜忘れぬ

中後源氏之後と云々を記す中に九条の山階のこゝろ

こゝろかたよき〜〜を結ぶ〜〜例す〜〜

君止むと云は山階乃こゝろ〜〜のまじり〜〜は〜〜

亦いふ〜〜のち〜〜後後の後せ〜〜例は

た〜〜のち〜〜唯のとん〜〜の〜〜

い〜〜のち〜〜

こゝろ〜〜のち〜〜

も〜〜のち〜〜

か〜〜

た〜〜のち〜〜

あ〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

今〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

た〜〜のち〜〜

新待賢門院六海村上幸國母
阿野公原ノ女御三任ノ后
准后兼子大塔宮継母ナリ

女院兼平朝正年十二北宮延文三年
四月十日

松下柳邊といふこと

雲うねるこぼれ山雲のうねるうねるはりの雲つゝ

拙童

まゆふとよも拙童といふひもせき雲のうねるのうねる

古代と

水と小舟古代は雨とよねをうねるはりの雲つゝ

細の男も古代は雨とよねをうねるはりの雲つゝ

中候准后漢とる為に古代に小舟も古代はりの雲

く小舟の心も古代はりの雲つゝ

どのぼつとるの雲つゝ古代はりの雲つゝ

歌多と

かどのうねる井も古代はりの雲つゝ

古代と

雲つゝをうねるはりの雲つゝ

うねるはりの雲つゝ

雲つゝのうねるはりの雲

梅つゝはりの雲つゝ

三月十日のうねるはりの雲つゝ

そのうねるはりの雲つゝ

今もうねるはりの雲つゝ

雲つゝ古代はりの雲

春の雲も古代はりの雲つゝ

梅三月の雲つゝ

二つうねるはりの雲つゝ

ふ身せしむるもなかりに申すはつる清乃なるも
なかりにふもなかりに

よしよもつるもよしよもつるもよしよのよのよれぬ

夏歌

石をちよふつ申す影樹

春のつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

やまゆふとつれづれと

やまゆふとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

中流津流津とつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

なるは志也のななる身とつれづれとつれづれとつれづれと

もつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

をんつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

のつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

はつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

つれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

瞿麦花

けつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

約部

よつれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

つれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

つれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

思ひ結ぶつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

つれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

つれづれとつれづれとつれづれとつれづれとつれづれと

恐るるのほろあせしほしき子なるにたのむのたのむ
秋後信一と書かすはるる

一声をばけりつたあせしほしき子なるにたのむのたのむ
西中節をた

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
杜教をた

なまわききくまのまじれ村あるまじり
秋後信一

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
ほしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ
あせしき子なるにたのむのたのむのたのむのたのむ

延元二年五月廿九日書かす信一と書かすのたのむのたのむ

うらやま いろいろいふいろいろ現れたいわゆるわたりしめわち

延元三年丹波自吉野にて新待賢門院いまは准后の御

より一は高麗の根を海へついでておとのむらの御

はよむらちのわたり根と知たんと仰る

ゆきまのいもりあそこのいぬ高麗丹野をいもむく

後まむらり一にねのめとの山をいひの四方より

作のいひはあゆり一も霧中百首中よ高麗城

わちあつとそむとらわちいもち都もあし梅たらし

梅と

あらしあの花とく若くしむとていもあまの神のあ

故に乃藤の信も今うた候めんといひ

今いまいあ神のあをあらしむむとた乃若のい

お月あ

こころとく人よあまのあ門のいこと川乃あ

あまのたぬる水あはあをあああしあ月あ

あまのあえくまはああああああああああ

信たあ伊系とああああああああああ

小都くあああ

あまのあまあまああああああああああ

あまのあああああ

あ神乃あああああああああああああ

甲あ

ああああああああああああああああ

照あ

わさくしといふはるきいひきつて清くかきよき風よほす
ころはふちをせしむるにまさるるを心ざればよきおき
友の初れいふはるきいひきつて清くかきよき風よほす

おほくもなきてわかちあひのきよき清くかきよき風よほす
夏月

夏乃初れいふはるきいひきつて清くかきよき風よほす
鞍中百を詠乃中よ夏月

清くかきよき風よほす
夕ま

夕まをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす

雲

なむかきよき風よほす
あつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす

ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
山をたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす

ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
初稔のいふはるきいひきつて清くかきよき風よほす

ゆるみえよるるをたごころとてあつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす
あつきのまはるきいひきつて清くかきよき風よほす

鞍中初稔といふはるきいひきつて清くかきよき風よほす

秋をせよ御へき園のちきれを正しくなりぬまゝの志は
申後准后を侍申す 秋をのりてさうらうのゆきを
かひゆるるるを深しき秋をさすまゝの例は

ちかぬて月もゆきも秋の芳をいささかうれしくせむを
六月秋をいささか

夏と秋とゆきもふたふたの秋は川原とて終に風を深しき

秋歌

万葉集巻第十の五秋

秋の風を秋の葉もむきむき後とて風を身かむ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
海辺に秋をさすまゝ

秋をさすまゝ秋をさすまゝ秋をさすまゝ秋をさすまゝ
七月七の秋を

ゆらゆらなまのいまの秋毎とて秋を秋を秋を秋を
よの秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか
七夕の秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか
織女とて秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか
秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか
秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか

秋の風を秋の葉もむきむき後とて風を身かむ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
海辺に秋をさすまゝ

秋をいささか秋をいささか秋をいささか秋をいささか

たつてせむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
うせむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
いふもたれん秋はくらくらと我せる一秋の心も

あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も

あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も

あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も

あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も
あふむしきまれば秋はくらくらと我せる一秋の心も

秋風

秋風はくらくらと我せる一秋の心も
秋風はくらくらと我せる一秋の心も

秋風はくらくらと我せる一秋の心も
秋風はくらくらと我せる一秋の心も

秋風はくらくらと我せる一秋の心も
秋風はくらくらと我せる一秋の心も

秋

秋はくらくらと我せる一秋の心も
秋はくらくらと我せる一秋の心も

秋

秋はくらくらと我せる一秋の心も
秋はくらくらと我せる一秋の心も

秋はくらくらと我せる一秋の心も
秋はくらくらと我せる一秋の心も

秋はくらくらと我せる一秋の心も
秋はくらくらと我せる一秋の心も

暖る方ち程り入りぬらん一に木の葉の影にたたくるも人
くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

舞臺にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

あふぬに程の葉の影にたたくるも人くこにたがふ事せ給ふ事なき

中後雅石のきりり一秋の中に
きりりしほよもたのなききりりし

老くはまゝいづるしゆり一乃
たはまゝいづるしゆりしゆり

まゝいづるしゆりしゆりしゆり
秋の夜いづるしゆりしゆり
まゝいづるしゆりしゆりしゆり

夕月夜ももよほの秋を
まゝいづるしゆりしゆりしゆり

田原麻呂

いづるしゆりしゆりしゆりしゆり

西霧中なる候侍一申に麻呂

まゝいづるしゆりしゆりしゆり
石を分りしゆりしゆりしゆり

夕月夜ももよほの秋を
まゝいづるしゆりしゆりしゆり

いづるしゆりしゆりしゆりしゆり

まゝいづるしゆりしゆりしゆり
いづるしゆりしゆりしゆりしゆり

石を分りしゆりしゆりしゆり

夕月夜ももよほの秋を
まゝいづるしゆりしゆりしゆり

秋に古里いこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は
あめこころさうりいこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は
なこころのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は
中代准后を傍りてははるを待て中代行くとあめあめさし入は
あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

あめあまのあまこころ雁と秋の月をいそぐもさし入は

なまのほし林も人も不見なるころのたのむらと月
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
野月

ふきほろおの秋のほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

東月

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

西月

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

沼月

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

池月

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

月をよぶ

おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ
おせのほしのほろきほそをたふすめに月をよぶ

いづるのちの田子の浦をさすもあはれもなむとわらふ

海辺月

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ浦風吹

哉中國かこの浦をさすもあはれもなむとわらふ

都よりあはれもなむとわらふとわらふとわらふ

をさすもあはれもなむとわらふとわらふ

漣にやみしほあはれもなむとわらふとわらふ

漣にやみしほあはれもなむとわらふとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

浦月

難とて浦のまはれもなむとわらふとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

竹園月

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

とよみし林をよしのあはれもなむとわらふ

月いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
に流るる月あはしにまらるるの中に

こころいりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
申候流るる月あはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々
いりりしあはしにまらるる一々

いりりしあはしにまらるる一々

口々にいふはなほなほと語りて一筆の月を
秋のころにさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の
あつたはなほなほとさするは例の

たうをばらうましの影をたせし月を照る物乃やよのひら
真由二年八月の宮より八月の宮より八月の宮より八月の宮
會一傳一伝一後傳まら

あしいつらまの八月の秋乃月を照る物乃やよのひら
年深しは八月の宮より八月の宮より八月の宮より八月の宮

うまあつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
まふ人乃つら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら
あつら秋のなを月影を照る物乃やよのひら

都を風のはらけに海へ

秋田

風よまゝに海へ
もよほすに海へ
と海田の海へ
くまの海へ

社名

あつたに海へ
長月のまらけに海へ
山後

海へ
海へ
海へ

海へ
海へ
海へ
海へ
海へ

海へ

海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ
海へ

を乃うと見えしは山路乃昔の風、糸俣とすしうしん

九月九りる事とすもる

哉らしは流ひかゝる花の葉山路乃葉乃ほめりあはれ
知きしと行そ流ひまゝは花の葉乃葉乃の事

二葉乃と

朝露の福乃葉乃とて葉乃とては、秋の葉乃とては

世道の名をたかひにせしむるは、秋の葉乃とては

なすの葉乃花の葉乃とては、秋の葉乃とては

はらふ葉乃花の葉乃とては、秋の葉乃とては

たふさきに花とては、世道乃とては、秋の葉乃とては

二葉乃の事とす

く世乃とては、世道乃とては、秋の葉乃とては

秋のくれは、葉乃のむせりては、秋の葉乃とては

うらたては、世道乃とては、秋の葉乃とては

九月十日も葉乃

人、あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

中後世乃とては、秋の葉乃とては

あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

又、あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

身、花乃とては、世道乃とては、秋の葉乃とては

二葉乃とす

あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

く、あはれとては、世道乃とては、秋の葉乃とては

冬歌

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

戦中軍はるる羅軍百を後侍よ初冬を

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

初冬乃ら後ぞとみ侍たり

ほろろわたりてもさるる一物に花にうらみあはれし御
香

かりしものもさるるのよき御香に御香に御香に御香
御香に御香の香に御香に御香に御香に御香に御香
あまのりにはるる水尾の風を御香に御香に御香に御香
御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香
御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香
御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香

ありしにさるる光もさるる御香に御香に御香に御香

御香の香に御香に御香に御香に御香に御香

りよりの御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香

わたりしにさるる御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香

ゆかりに御香に御香に御香に御香に御香に御香

りよりの御香に御香に御香に御香に御香に御香

りよりの御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香

りよりの御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香

御香に御香に御香に御香に御香に御香に御香

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

のまじりしにまじりてしるも
信濃守御家の少輔宗忠は
後くさるりては
稀なるのほかに
岐の言ぬくは
ゆのハ
信居家

中後雅后及之御一筆に
をたすうとるうとと
をたすうとるうとと
をたすうとるうとと

のしらるるまよひ
はたしあやうと
まよひとまよひ
まよひとまよひ
まよひとまよひ
まよひとまよひ

恋歌

百首方清傳一申に

かりい傳をうまのよ
よりまよひと
まよひとまよひ
まよひとまよひ
まよひとまよひ
まよひとまよひ

相と心新清傳
をたすうとるうとと

忘れまよひと清傳一申に

をたすうとるうとと
中後雅后及之御一筆に
をたすうとるうとと
をたすうとるうとと
をたすうとるうとと
をたすうとるうとと

忘れまよひと清傳一

をたすうとるうとと
中後雅后及之御一筆に
をたすうとるうとと

忘れまよひと清傳一

神よかたしと今や
あはれんぞい入
神よかたしと今や
あはれんぞい入
神よかたしと今や
あはれんぞい入

百首方清傳一申に

とていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
らむとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
位徳はゆるるのしちきりたるに位徳一頃

わくまやち海方の機はちのしりたてりてあつとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

原は後とていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

細中右衛門守左衛門尉

くちあつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

也所なるちそす後には果しつる中にあつとていへば

あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

あつとていへば

あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて
あつとていへば後なるはえしむる事なるべしとていへばわたりて

ら
年より一松乃下
電

奇

あ
人の

あ

早

あ
中
あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ
中
あ

あ

あ
あ

あ

あ
あ

あ

この祭とまの〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

あの〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜 宿乃た〜

身のまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま
しむるの *Omnia in fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
は又いつるは其の憂なる身なりて其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま

中塚雅信の書信 *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

ふまじき終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま
しむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま
しむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま
しむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま
しむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる
の終つてしむるの *In fine* などいふものにせむし其の終つてしむる

そのまじきならしていかに其の憂なるに人なりて其のありさま

月より澄くはれぬの如く同くあはれしむる人となすはまじき事

あはれしむる人となすはまじき事

あはれしむる人となすはまじき事

あはれしむる人となすはまじき事

芥のえはほしめしむるにほむるはかたしむるはあはれしむる

よのほしめしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむる

年入るるはほのほむるなるはせしむるはあはれしむる

そののほしめしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむる

今よりいふまじき事一むらりしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれしむる

あはれしむるはあはれしむるはあはれしむる

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

雑歌

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

雑歌

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

雑歌

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて
あはれなるはなはなとて

わー根をよむに乃ち此水多し下の水もひこむらん
中後准宿をよむに 分申に 申中よむかひひのり
いとせむかすまに 柳木のたきまに

君いしむとあつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに

あつるふゆに 布指りたるらん
いとせむかすまに 柳木のたきまに


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

はらへ給へ 町のあはれも 入るおぼしき せう神不徳らる

長月の後一年 信守多る 忠告いへり

中 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

申渡す 申渡す 申渡す 申渡す 申渡す

そとあさく移りたるのまじりてつらき海はなほ  
本邦のよきと傳へしに北の風のこゝろを  
むすむすの風のまじりてつらき海はなほ

本邦のよきと傳へしに北の風のこゝろを

あつたはるる海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

海はなほつらき海はなほつらき海はなほ

美濃の浦へも舟のさし入るかあるとて、船せりぬ  
延元二年の秋は舟もほせし船もあきしるに  
と氣瀬もやも舟せぬもあきしるに  
そしし舟にあき船もあきしるに  
しるの慶しる舟もあきしるに  
舟に渡夜は舟もあきしるに

うほおおとあきしるに舟もあきしるに  
旅の舟もあきしるに

秋は舟もあきしるに舟もあきしるに  
中後唯后乃世傳舟中に  
しる舟もあきしるに

美濃の浦へも舟のさし入るかあるとて

しる舟もあきしるに舟もあきしるに

延元二年の秋は舟もほせし船もあきしるに  
*延元二年の秋は舟もほせし船もあきしるに*  
舟もあきしるに舟もあきしるに

舟もあきしるに舟もあきしるに

舟もあきしるに舟もあきしるに

舟もあきしるに舟もあきしるに

いほほしたるまふ〜いほほ雁てあま〜と都乃乃人の〜ほをか〜  
しとに西〜いほほ人の〜なまふ乃浦よぼほ〜信あはれ〜りあん  
正事

福の信を〜もま〜しは雁の〜ほをな〜とねよあひ〜らん  
あひのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
ほほほほあま〜いほほほほあま〜いほほほほあま〜いほほほほあま〜  
ほほほほあま〜いほほほほあま〜いほほほほあま〜いほほほほあま〜

あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
月日のせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら

あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら

あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら

あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら  
あまのせを〜あひ〜せな〜のあま〜るま〜いほほ〜いほほ〜いほほ〜ら

〜



くつひゆたはゆきもしむらびりふらひてはつひもすけり人  
に波由はゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
たらし人の津ふりつりー伝ー

富を乃取の燈いしきとに男こよ尚間かひをこつり、こまなを  
右そ乃後ゆきゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
ら詰るすらうれうーとあちぢのたつらにものいしむら

中役雁居まふむを御前中におつたごきんまの年を  
こえわたるは御前中かまふまふは例ふす加倍りつり

あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
くうーとあちぢのたつらにものいしむら

あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川

あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川

あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川  
あふりたまはゆきまほふふくの若うーはり波に流川

正平七年北ノ文和元年  
頃上ノ宗良親王神中格御  
征夷大將軍ノ宣旨アリ

ふきかき集く物定乃并八はう傳 此小贈言乃たよ  
たぬのやうまじしやくせいのあつた中 此方と  
す

あなましちた乃杜の名張りと志くふとるはれの地もそ

口ふ首す世中にまことしき傳

いものほろむや海をわかれ浦のま街乃すはくはつてはち

口ふ首す世中にまことしき傳

山海の橋の杉本と成ぬまことしの無ふえに色あはるとなま

世中

為定

あいなむれと集乃翁のまじ社杉葉浦まじははつてはち

奥國乃頂嶺乃あままわ川をくまはつてはち

うきしよのあひはつてあま包乃ねるまじははつてはち

世中

為定

あいなむれと集乃翁のまじ社杉葉浦まじははつてはち

後記 正平九年以前  
治二年

今昔の事小風程集の撰をよみ  
歎まじしやうまじしやくせいのあつた中  
此方とす

海屋拾遺撰傳 此立報まじあまなむれ難編まじ

かしの卯に作者まじらり傳まじに今方同撰集

とまえらるるまじやえらるるまじ身のよま

まじ傳 此あまなむれまじ撰集まじははつてはち

ゆめまじあまなむれまじ撰集まじははつてはち

まじを記伝まじ傳 此ま

いふなむれと集乃翁のまじ社杉葉浦まじははつてはち

あいなむれと集乃翁のまじ社杉葉浦まじははつてはち

うまじしやくせいのあつた中 此方とす

うまじしやくせいのあつた中 此方とす

此方とす



ついでに身も知る事あればおぼしむるにやうしよの事  
都ともこのついでにまじりていふに地もつづり

せらゆのらほのよにまに清む海に舟をよぶるに  
いふなれおぼしむる有るむ人の汗へかきかへ

末つるにうらむるを梓弓人よまのほら成せば  
都のゆも身もさかすをさかすをさかすをさかす

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事

いふに乃らむるにやうしよの事  
いふに乃らむるにやうしよの事



一のいもまののりしるはあはれをあらわすは  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ

うまはれしるはあはれも難波にのきりよはれはあはれ  
あはれ









あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
志くまうあつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
知り人ごしとまにけき今うなあてふこととあつま  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
とつねなうまはつとあつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
ことなまぬらうはつとあつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
いせしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

中流推后よりしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを  
あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを

あつはきしるしにふも六程もなまぬらうはつを





霧中十日前方中に霧煮の如く

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

中流准后よりた教よりいつかの現世を福として

流ぬよもあつたを中とて例年てはる御

そら中いきて況にたまあておきても種となふりつて

た都方申に

何よの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

辭言喻品

小車乃の如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

小車乃の如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

序品入於深山思惟佛道

山ありてその如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

方便品其智惠門難解難入

入くまきもの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

此城喻品故佛方便推化此城

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

己の如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

提婆品北日遥見彼竜女成佛

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ

囉田梨品如是為守勅 處具奉行

あつたの如くしるしをせよいつかぬひこもをたすけをせよ



祝の心を遣はる

ららるるまはるる人今とてはまはるる今清代の御み  
い後ハれもさるるし清の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇一國を祝

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇郡祝

名もとる清の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇都祝

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇よる清の御み今とてはまはるる今清代の御み

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇中百首を祝をよみ侍

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

寄天祝

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

東夷を征はるる將軍の道旨をよみ侍

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

のちかたに皇の御み今とてはまはるる今清代の御み

皇の御み今とてはまはるる今清代の御み

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

建徳二年九月七日鎮西より便書

中務卿親王良懷九列言

清の御み今とてはまはるる今清代の御み

建徳  
二年九月七日  
鎮西より便書

同正三ノ年十二月三日  
いれりて今ハ世宗ノ  
修りて七はしん

此本者先師兵部卿師成親王  
出家号 筆跡之  
教弘相傳之  
享德改元仲冬廿日 夕々良朝臣互判  
右以本阿本書口之但彼写本於防加内文庫  
之物物取出之決率尔今借用半日馳筆之  
間落書而等多之猶重而以證本可加校合也

此本者先師兵部卿師成親王  
出家号 筆跡之  
教弘相傳之

享德改元仲冬廿日 夕々良朝臣互判

右以本阿本書口之但彼写本於防加内文庫  
之物物取出之決率尔今借用半日馳筆之  
間落書而等多之猶重而以證本可加校合也

京師録四曆極月廿七日 兵部中輔中原遠忠

宗良親皇

扶桑拾遺皇系云

後醍醐第七皇子二品座主母贈從三  
位藤原為子推大納言為世卿女入妙  
法院室號尊澄法親王後還俗改宗良

櫻雲記 一節 澄親王 宗良親王 稱不云

同記 天授三年 宗良親王 子 眞良王 北朝 因 歌 せら 時 病アリ

心 絶 へ 天 和 奇 天 宗 良 三 年 九 月 八 日 崩 御 終 焉 御 終 焉 乃 崩

家 良 三 年 九 月 八 日 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

既 一 翌 日 眞 良 親 王 子 宗 良 三 年 九 月 九 日 崩 御 終 焉 乃 崩

内 東 三 年 九 月 九 日 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

若 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

若 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

若 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

若 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

若 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩 御 終 焉 乃 崩

仍 皇 孫 也

中 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

仍 皇 孫 也 仍 皇 孫 也

